

ミルトンと至福直観

道家弘一郎

### **Milton on the Beatific Vision**

---

Dr. Takeshi Saito refers to the lack of the beatific vision as a defect in Milton's *Paradise Lost*. Then, what is the beatific vision? It is the happiest experience in which we should be able to see God directly face to face in our life after death. In Dante's *Divine Comedy*, the vision is placed at the close of the poem, because it is the most important corner stone on which the whole structure of the poem rests. And the vision is regarded as the ultimate end of contemplative life which is emphasized in the intellectualism from Aristotle to Thomas Aquinas.

But Milton starts from another point of view. The scenes in which Angels and Adam see God face to face are placed in the beginning books of *Paradise Lost*, that is, before their Fall. In other words, the scenes are destined to vanish soon after the Fall. It is because Milton makes little of such an ephemeral experience that he mentions it so briefly. Therefore the beatific vision in *Paradise Lost* is not given such a value as in the *Divine Comedy*.

In the same way, Milton makes Raphael repeat his warning to Adam lest the latter should rely on reason too much, whereas, in the intellectualist way of thinking, reason is the highest human faculty. According to Milton, the ultimate aim of human being is not to know God, but to obey His will. Especially after the Fall, in which human reason's sovereignty is taken over by passion, the figure of Christ as the example of obedient belief becomes greater than before. In the voluntarist way of thinking, reason wanes, and belief has gradually taken a greater position. The reason why Christ appears as both the Creator and the Judge in *Paradise Lost* must be sought in this aspect of thought. In order to be the Redeemer, the Son must not be less than the Father, the Creator and the Judge.

## I

斎藤勇博士は、ミルトンの詩の弱点として *visio beatifica* の欠如をあげ、「神を仰ぎ見て感謝の一念に充ちた祝福の心境が不十分であることから起こっている」とされる。ミルトンを自己意識が強過ぎて没我的恍惚にとぼしいと感ずる人たちは、斎藤博士のこの評言に賛意を表するであらう。では、いったい *visio beatifica* とは何であるか。斎藤博士はそれを「祝福されて神を見ること」と定義し、聖書における典拠をマタイ伝五章八節「心の清い人たちはさいわいである、彼らは神を見るであらう」に求めておられる。<sup>(1)</sup>

そのほか「神を見る」という表現を聖書のなかに捜せば、ヘブル書二二章一四節、ヨハネ第一書三章二節と六節、およびヨハネ黙示録二二章四節などが挙げられるが、*visio beatifica* との関連で最も意味の深いのは、コリント前書一三章一二節である。そこには、「わたしたちは、今は、鏡に映して見るようにおぼろげに見ている。しかしその時には、顔と顔を合わせて、見るであらう。わたしの知るところは、今は一部分にすぎない。しかしその時には、わたしが完全に知られているように、完全に知るであらう」とある。こういうふうに、*visio beatifica* とは、「完成した人間が、その知性をもって三位一体なる神を直接直観的に知る知識」であり、「キリスト教徒にとっては人生の最終の目的」とされる。<sup>(2)</sup>

もとより最近では、カトリックとプロテスタント双方の神学者とも、「顔と顔を合わせて神を見る」という聖書のことばを、神の聖前において歓喜にみちて永遠に生きることと広義に解釈するようになったが、中世の神学者た

ち、とりわけアリストテレス哲学の影響をうけたトマス・アクィナスその他の人たちは、知性の働きによって神の本質を直接的に直観ないし知覚すること、と見なした。ダンテはその影響下にあった。『神曲』の最後を飾る「見神」のヴィジョンはまさにそれであつて、ダンテにとつては人間が到達しうる最高の幸福なる境地である。三位一体の神が、崇高な光の深々と輝く実体のなかに、三色で同じ大きさの三つの円環としてあらわれた。第一の円環（父）は、虹と虹とのように、第二の円環（御子）に映つて見えるように見え、第三の円環（聖霊）は第一と第二から等しく吹きかけられる火のように見えた。

ああ永遠の光よ、あなたはあなたの中のにみいて、

あなたのみあなたを知り、あなたに知られ、

あなたを知りつつ、愛し微笑む！

（二二四—二六行）

二行目の半ばまでは三位一体の神をあらわし、二行目の後半は御子を、三行目の前半は父を、その後半は聖霊をさす。ダンテがしばらくそれを見つめてみると、第二の円環のなかに人間の像が描き出されたように思われた。ダンテの視線はすっかりその上に釘づけにされる。これは御子の受肉の象徴である。ダンテは、人の像がいかに神の円と合致し、像がいかに円のなかに生じたかを知ろうとするが、円の大きさを測ろうとして、測量に必要な原理を見出しえぬまま思案する幾何学者のように途方にくれる。しかしそのとき、恩寵の光が彼の心を射て、その願いを満足させる。はやくも彼の知性の願望と聖意への意志とは、「さながら等しく廻る輪のように、太陽ともろもろの星を動かす愛によって廻っていた。」

C・S・シングルトンは、ここにおいても知性が優先し意志がそれに従う、として、天国篇第二八歌一〇九―一行を参照せよ、という<sup>(4)</sup>。

真理を観ること深きに従い

その祝福もまた従って深い

真理は知性に安息を与う

知るべし祝福の源は

観ることにありて愛になきを

愛はそのうしろに続く (三谷隆正訳)<sup>(5)</sup>

一〇六―一行

シングルトンはさらに、この箇所への注釈において、ダンテの立場は、トマス・アクィナスやアルベルトス・マグヌスら一般にドミニコ会派の哲学者や神学者と同じで、意志よりは知性に優位をおく、それに反して、知性よりも意志を重んずるのが、アウグスティヌスの流れをくむフランシスコ会派の立場である、と述べている<sup>(6)</sup>。また第一四歌四〇―四二行も、そういうダンテの主旨主義を示す箇所として挙げている。ダンテの至福直観が、そういう思想史の大きなうねりに結びつくものであるとするならば、その由来をたずねて、われわれはアリストテレスに赴かなければならない。

## II

畏友岩田靖夫氏の近著『アリストテレスの倫理思想』（岩波、一九八五）にしたがって、アリストテレスの哲学を要約しよう。彼の思想の大前提は、「神の本性が理性であり、人間のうちにはこれと同質のものが、その力においては比較にならないほど劣っていても、とにかく存在する」（三九二頁）という確信である。したがって、神にとっても人間にとっても、「理性がそれにもっとも固有の卓越性を発揮している観想活動が究極の幸福である」（三八四頁）ということになる。この点において「人間の幸福は神の幸福の縮小相似形を成す」（三九三頁）。また人間の本性も神の本性と同一であることにより、「この同一性の次元において人間は普遍的な精神の世界へ開かれて（おり）……人間の活動の究極の目的は神の活動への同化」（三九三頁）となり、したがって「可能なかぎり神の活動の模倣」（三九四頁）をしようとする。しかるに「神が世界を見るとすれば、神は世界を自己の外にはなく自己の中に見る他はないから」（四〇二頁）、「神の観想の対象は神自身であり、それを通しての世界の認識でもある。……神の活動の模倣である人間の観想もまた、その動く方向は逆であるが、その対象を神とし、かつその世界認識において神的なものの現われをたどることであることは必然の帰結（であり）……アリストテレスが究極の幸福とする観想とは神の観想であり、また、宇宙の中に神を見るときという意味での宇宙の観想である」（四〇五頁）。これがトマス・アクィナスに受けつがれて、西欧の伝統的解釈となる。

しかしその際、トマスがロマ書一章二〇節を引いて説くとおり、創造主としての神の働きの結果を、被造物としての宇宙のなかに見るといふ考え方が導入される。これは、アリストテレスのギリシア的な汎神論的もしくは物活論的世界観においては、まだ十分に明瞭な形では成立していなかった。なるほど「万物は神々に充ちている」（『靈魂論』

四一—a八)のであるから、自然を神的なものと考え、自然のなかに神を見ることが出来る。また人間は宇宙にあるもろもろの事物の秩序や法則(いわゆる世界のなかの永遠的存在)をも認識するのであるから、この認識において、万物のなかに神の痕跡をたどるという営みは成立しえたであらう。だからこそアキナスはアリストテレスに依拠してその大体系を築きえたのであるが、両者の間にはパウロが、またアウグスティヌスが介在したのである。そのもう一つの現われは、アリストテレスの観想生活が現世における倫理的幸福の次元にとどまったのに対して、トマスの観想は、終末の「かのとき」にならなければ完成されない、そういう来世的宗教的性質をもつことである。

『神学大全』第二—二部第一八〇問題第四項には、こうある。

「第一に観想生活に属するものは神的な真理の観想である、かかる観想こそ全人間生活の目標であるから。それゆえアウグスティヌスは、『神の観想は、われわれすべての行為の目標として、また喜びの永遠の完成として、われわれに約束されている』(三位一体論一の八)という。かかる観想は、そのときわれわれが神を『顔と顔とを合わせて』見る、来世において完成される。そのとき、それはわれわれを完全に幸福にするであらう。しかし、現在、神的真理の観想は、『鏡をもて見る』とくおぼろに『不完全に、われわれのものであるにすぎない。したがってそれは、われわれに、今始まったばかりの幸福を与えるだけである。それは現世に始まって、来世において持続されるべきものである。したがってアリストテレスも、人間の究極の幸福を、知性の至高善の観想においている(倫理学二一七七a—一七)。

しかし、ロマ書のなかに『神の見えない性質は、被造物において知られていて、明らかに認められる』(一章二〇節)とあるように、われわれは神の働きの結果をとおして神の観想に到達することができるのであるから、神の結果の観想もまた、それをとおして人が神を知るにいたるのであるかぎり、観想生活に属することになる。それゆえアウグスティヌスは『被造物の考察において、われわれはむなしく無益に探究心を行使しているのではない。被造物は、不滅

永遠の事物への踏み石として役立つのである』(宗教的真理について二九)と言っている。」

アキナスはまた旧約から詩篇一四三篇五―六節「わたしはあなたが行われたすべての事を考え、あなたのみ手のわざを思います。わたしはあなたにむかって手を伸べ、(わが魂は、かわききった地のようになあなたを慕います)」を引用している。そして、被造物をとおして神の観想にまで上昇する六つの段階を区別している。第一は感覺的事物の考察。第二は感覺的事物から知的事物への移行。第三は、知的事物をとおしての感覺的事物の評価。第四は、感覺的事物によって得られた知的事物の固有の価値の考察。第五は、感覺的事物によっては到達できないが、理性性によって把握できる知的事物の観想。第六は、知性が見出すことも捉えることもできないような知的事物の考察で、これこそが神的真理の崇高な観想であり、観想はここにおいて究極的に完成される、とする。そして「人間の知性の究極的な完成が神的真理であり、他の真理は神的真理へのそれぞれの順序に従って知性を完成させる」と結んでいる。<sup>(7)</sup>

神父岩下壯一師のことは引用すれば、「徹底的な主知主義を確立する道は、一切有の存在の理由を、ただ知性ととの関係においてのみ認むるより他に途はない。すなわち物質の世界は靈の世界のためにのみ、その対象且附屬物としてのみ存在を許されなければならない。先ず知性が存して、然る後に一切有は知性のために存在しなければならない。すべての知性ならざるものは、ただ知性によって完全に捕捉され、徹底的に把持されるがためにのみ存しなくてはならない。完全無欠なる認識、これこそは全宇宙の目的であり究極の存在充足理由である。しかしてかかる完全なる認識は神においてのみ存する以上、スコラ哲学の主知主義は当然一切有は神のために存在するという結論にまで導くものである。然らば人間知性の究極の目的は何かというに、この神の完全無欠なる認識への参与以外にありえない。トマス<sup>(8)</sup>の認識論がこの至福直観(visio beatifica)において終結するはそのゆえである。……至福直観とは吾人が死後の生命において、神の本質を直観することの謂である。このときに当たって人間の知性は一切の被造観念を超越して、



神の本質において其の本質を視るのである。」<sup>(8)</sup>

### III

観想は、神の観想到達する前に、その前提として宇宙の観想を包むことは前節に述べた。こういうふうに被造物をとおして造物主に、WorksをとおしてWordに到るといふのが伝統的な観想のプロセスであった。ミルトンの『失樂園』において、かかる宇宙の観想が最も大規模に展開されるのは、第七・八巻における天地と人間の創造の場面である。ただし、ここにおいては、アダムもまだ墮落以前のアダムであり、そういうアダムに天使ラファエルが話を聞かせるという状況を念頭におかなければならない。

墮落以前の人間にとって、最高の精神的機能は理性である。低次の機能が、理性をその主人として仕える(五・一〇〇—一三)。「理性こそ靈魂の本質である」(五・四八七)。こういう理性を与えられたがゆえに、「背をのびして直立し、穏やかな額を真っ直ぐに保って他のものを支配し、自らを知り、そして自らを知るがゆえに神と交わるにふさわしい高邁な心をもち、しかも同時に自分のもつ一切の善きものがどこから下賜されているかを知り、感謝し、しかして、つつしんでその心と声と眼を天に向けてそそぎ、自分を万物の長として造りたもうた、いと高き神を崇め、捧むことができる」(七・五〇七—一六)。理性は、自然界を支配し、人間界を知り、超自然界と交わる能力である。

このような理性の到達しうる極致が、至福直観のはずであった。しかし『失樂園』においては、それは大変あっさり触れられているだけで、『神曲』におけるように、それに向かって、すべての要素が築き上げられていく構造のかなめをなしていない。『失樂園』一卷六八四行に Vision beatific ということばがあるが、墮天使マンモンが、まだ天国にいたときでさえ、つねにその眼と心を下に向け、都大路に敷きつめられた財宝、足下に踏みつけられた黄金を、

神にまみえる祝福よりも賛美していた、という説明のなかである。五卷六一三行に *blessed vision* ということばがあるが、これは、神が御子を撰取と定め、天のすべての者がその前に跪き、彼を己の主と告白することを求めたとき、もしこれに背くものは *blessed vision* から追われて暗黒の奈落に呑みこまれる、という宣言のなかにあらわれるものである。

むしろ *beatific vision* が、このことばこそ使われていないが、その本来のすがたで歌われている箇所は三卷六〇一六二行である。最初の二巻が地獄の描写についてやされ、第三巻になって初めて天上界の描写となる。光に呼びかける有名なインヴァケイションの後、父なる神と、神をとりまく聖なる天使たちが描かれ、

About him [i. e. the Father] all the sanctities of heaven

Stood thick as stars, and from his sight received

Beatitude past utterance;...

彼のまわりには、天のすべての聖なる天使たちが

綺羅星のように群がり、その御顔を仰ぎ見、人間の言葉では

とうてい言い尽せぬ聖なる祝福の喜びに浸っていた (三・六〇一六二)

とある。

以上の三例はいずれも天使たちが神を見る場合であったが、人間が神を見る場合は、第八巻において天使ラファエ

ルの求めに応じたアダムが、人間としての最初の意識のなかで出会った神を描いている箇所である。自分自身でこの世に生まれたのではない以上、創造主が私を造られたはずだ。その方をどうしたら知り拝むことができるか言ってくれ、と万物に呼びかけ、物思いにふけりながら腰をおろすと、睡気がおそってきて夢として或る姿があらわれる。その神々しい姿に連れられて楽園に来る。そこで眼が覚め、それまで案内役として山頂までアダムを導いてくださった方が、樹々の間から聖なる者としてのその御姿を現わされ、アダムはその御姿を見て歓喜にあふれ、しかし同時に畏れおののき、その足もとに恭しくひれ伏す。

... he who was my guide

Up hither, from among the trees appeared

Presence divine. Rejoicing, but with awe

In adoration at his feet I fell

Submittiss:...

(八・三二二—二六)

彼はアダムを起こし、厳しくかの禁制をつたえ、またもとの爽やかな表情にもどって、全地球を支配するように、そのしるしとして万物に名前をつけるように、と語る。アダムはそのときの神を the Heavenly vision (八・三五六) また the vision bright (八・三六七) と呼ぶ。アダムは神に、その孤独をいやすべきイーヴの創造を頼む。両者の孤独をめぐる興味ぶかい対話の後、神はアダムの願いを聞きとどけることを約束する。アダムは「厳かな神との対話に極度の緊張を強いられ」(八・四五四—五五)、疲労し、朦朧となって眠りに陥る。眠りから覚めたとき、イーヴが創造

主に導かれて現われる。しかしそのとき創造主の御姿は見えず、御声が聞こえるだけである（八・四八五―八六）。人間が神を見ることは、これによって終った。

『神曲』においては人間の歴史の終局にあったヴィジョンが、『失樂園』においては人間の歴史の発端にのみある。この違いは大きい。『神曲』においてはヴィジョンが目的であって、すべての要素がそれに向かって構築されるが、『失樂園』では、それはすぐに消え去るヴィジョンである。その後にはすべての困難が待っている。そのようなヴィジョンに、ダンテにおけるほどの価値が与えられていないのは当然である。近代においては、それと符節を合わせるかのように、ヘンリー・ウォーン（The Retreat）においてもワーズワス（Immortality Ode）においても、栄光の時期が前世におかれている。これはさらに、ニュートンやダーウィンの世界観において、終りにではなく初めにのみ神の存在が前提されていることと無縁ではない。

## IV

ともあれ『失樂園』においてアダムが神を見るのは、ほんの僅かな時間である。イーヴが造られるまでのことであった。このように、神の姿を直接目のあたりにすることははや不可能であるが、造られたものなかに造り主を見ようとする理性の働きは旺盛である。アダムとイーヴは口をそろえて、朝の祈りを次のように唱える。

おお、主よ、善を生み給う者よ、全能なる主よ、  
これらの万象こそ汝の栄光を現わすものなれ！　かく奇しくも  
美しきこの全宇宙こそ、まさに汝の御業！……

……汝はもろもろの天の彼方に坐し給うも、われらの眼に見えず、ただ汝の造りしいと低き御業の中にほのかに姿を見せ給う。されど、これらの御業は、われらの思いを絶する汝の善と、聖なる御力を現わす。

(五・一五三―一五九)

それゆえアダムは、われわれの知識を導く途、「一切の創造られたものの本質を思索ながら、その上を一步ずつ昇ってゆけば、やがて神の御許に昇ることができるといふ……自然の階梯」(the scale of nature.../. . . whereon/in contemplation of created things/By steps we may ascend to God: 五・五〇九―一一二)があることを信じていた。

しかし、こういう神への途を可能にする大前提として、「もしお前たちが従順であれば」(五・五〇一、五二二―二四)という条件がある。われわれが従順であって「神の愛」(五・五〇二、五二五)を失わないことが必要なのだ。幸福な生活を続けるかどうかは、従順如何にかかっている、とラファエルはいう(五・五二〇―二二)。「理性もまた選択である」(三・一〇八)という難解なことばも、こういうコンテクストにおいて理解することができる。したがって、不従順にして神の愛を失えば、やがては天使のようになれるという約束もたちまち覆ってしまふことが、すでに墮落以前に警告されることになる。

しかもこの人間の上昇志向のゆえに、神への不従順が、つまり人間の背信が起こる可能性がある。そのためにラファエルは、いまだ墮落以前であるというのに、しきりに理性の過度の行使をいましめるのである。主知主義者たちが、知性の十分な行使の果てに、感覺的事物から次第に離陸して、ついには知性が見出すことも捉えることもできないような知的事物の考察に上昇し、ここに究極の幸福を見出すのとは反対に、ここでは理性の上昇も離陸も禁じられ

ている。むしろ理性に鎌をつけて、地から足が離れないようにとの警告が繰返される。

煩をいとわず、ラファエルの警告を摘記したい。「限界を超えたことを訊ねたり、徒らに想念を逞しくして啓示されてもいらない事柄を知ろうとしてはならない。全知なる神は、それらの事柄を暗夜の中に閉じこめ、地上もしくは天上のいかなる者にも伝えようとはされていないからだ。探るべきこと、知るべきことは、これ以外にも多いはずだ」(七・二一〇—二一五)。

「大空はいわば神の書として眼前におかれており、そこに神の驚くべき御業を読み、その定め給うた季節、日、月、年を知ることができ。が、その他のことは、神は人間や天使の眼から賢明にも隠しておられる。自らの秘密を示して、本来賛美することを旨とすべき人間の徒らな詮索に委ねることを好み給わないからだ」(八・六六—七五)。

「天の空漠たる広さは創造主の至高の荘厳さを語るものであり、創造主がかくも広々した宇宙を造ったのも、人間に彼が自分だけの世界に住んでいないことを悟らせるためだ。人間は、廣大無辺の世界の狭い一角に住んでいるにすぎない。他はただ主なる神のみが知り給う用途に当てられている。神は人間の理解から己の配慮を遠くへだてておこうとして、地上から天の位置をはるか彼方に定められた。したがって、人間が地上から眺めるかぎり、あまりにも高い事柄については誤ったこともあり、そこになんの利益も見出しえない」(八・一〇〇—一一三)。

「このような秘められた事柄について、とやかく思い悩むのはよすがよい。こういった事柄は天に在ます神に委ね、お前はただ神に仕え、神を畏れるがよい。お前は神の与え給うたものに、この楽園とお前の美しいイヴに、喜びを見出すがよい。天は余りにも高すぎ、そこで何が行われているか、お前には知ることはできない。心から謙り下り、かつ賢かれ！ ただ自分と自分の存在にかかわることだけについて思いめぐらし、他のいろいろな世界のことについては、あれこれ夢想する必要はない。地上のことについてだけでなく、天上のことについても、これまで啓示された

ことだけで満足してもらいたい」(八・一六七—七八)。

それに対してアダムも、

「生活の実用から離れた晦渋で深遠な事柄について、ただ漠然と知るのではなく、日常の生活において自分の前にある事柄を知ることが最善の知恵だということ、それ以上のことはいわば煙霧のようなもので、空虚であり、無関係であり、愚かにもそれに拘とらわれると、人間に最も関係の深い事柄に対して疎かになり、不用意になり、ただひたすら昏迷に陥るのみとなりましょう」(八・一九一—一九七)と答える。

以上の引用は、理性を最高度に發揮して、過ちを避けよ、幸福をえよ、というのではない。'Be lowly wise'(八・一七三)という忠告は、むしろ理性の活動停止、少なくとも別個の途へ進むことを命じている。もともと人間の理性は、天使の理性と同質であるとはいえ、直観的であるよりは推論的傾向を持つ(五・四八七—九〇)。reason よりは reasoning に墮しやすい。かかる理性の放恣をいまして天使ラファエルが説く wisdom とは何か。

第七巻の初めで、セイタン墮落の顛末を語ってくれたラファエルに向かって、アダムが、「人間の知識」human knowledge(七・七五)が到底及びえない、この世界とは遠く異なる、人間の耳には驚異としか響きやうのない、しかも知っていなければ損失になるにちがいない偉大な事柄について、時期を失せず、天上から解説者を遣わし、人間が知っておく必要があると、「いと高き知恵」highest wisdom(七・八三)に従って判断したことを啓示させた、神の「無限の善」the infinitely good(七・七六)に感謝するくだりがある。かつ、その一節のなかで、人間の究極の目的は、神の意志を生涯変ることなく守ってゆくことだ。to observe/Immutably his sovereign will, the end/of what we are(七・七八—八〇)と述べている。

注解者アラスデア・ファウラーは、カルヴァンの『ジュネウヴ教会信仰問答』の第一問答、すなわち「問一 人生

の主な目的は何ですか。答 神を知ることでありませう」を引用して、ここにミルトンのアイロニーを指摘する。<sup>(10)</sup>これはただ単にアイロニーというにとどまらず、私がかつて「カテキズムについて」で指摘したとおり、ミルトンがカルヴァンよりはむしろルターに近いこと、ミルトンの立場が先知主義ではなくて主意主義であること、を示している。

ミルトンは墮落後の理性について、第九巻では人間の精神的諸機能の秩序が逆転し、いわば下剋上が起こったことを語っている。本来の順序は、理性↓悟性↓意志↓欲望のはずであった。しかるに、

「悟性」はもはや支配力を失ってしまい、『意志』はその命令を聞こうとしなくなった。つまり、両者は今や共に官能的な『肉欲』に隷属するにいたり、さらにいいかえれば、本来下位に立つべき『肉欲』が至高の『理性』の地位を篡奪し、それよりさらに強い主権を主張するにいたった」(九・一一二七—三一)。

第一二巻では、こういう、

「お前が最初の罪を犯してから、真の自由が失われてしまった。この自由はつねに正しい理性と絡み合って存在し、理性を離れて別個に存在するものではない。人間の場合、理性が曇ったり、理性の權威が失墜したりすると、異常な欲望と増長した情熱がすぐさま理性からその統治権を奪い、それまで自由であった人間を奴隷の境涯に陥れてしまふ」(一一・八三—九〇)。

ロマ書によれば、本来理性は神の示しに従い、被造物をとおして神を知ることができはずであった。しかし罪はかかる真理の働きを妨げ、「神を知りながら、神としてあがめることも感謝することもせず、かえって、むなししい思いにふけり、心は鈍く暗くなった。自分では知恵があると吹聴しながら愚かになり、滅びることのない神の栄光を、滅び去る人間や鳥や獣や這うものなどの偶像と取り替えた」のである(ロマ書一・一八—二三)。

つまり、これが人間の実状である。こういう窮状から人間を救う者は誰か、という問いとも願ひとも祈りともいふ



べき叫びが、哲学とは次元の違った宗教的要求となるであろう。

『神学大全』の神の観想が、ここに引用したロマ書のパラグラフのなかの聖句に依拠していたことは先きに述べたが、パラグラフ全体の趣旨を考えれば、パウロはむしろ、人類の罪による、神観想の不可能性を語っている。このパラグラフにおいて「自然神学を確立することがパウロの意図ではないし、意図にもあらず、自然神学を作りあげていくわけでもない」とは、現代の聖書注解者のことばである。われわれが、「もろもろの世界の神の言にて造られたるを悟る」のは信仰によってなのである（ヘブル書一・三）。

## V

いったん哲学的次元から宗教的次元へ関心のありかが移ると、何よりもクローズアップされるのはキリストである。『失樂園』でキリストが最初に読者の前に紹介されるとき、彼は「神の栄光の輝かしき像」「The radiant image of his glory」（三・六三）として神の右に坐している。「父なる神のすべてがキリストのなかに実質的に 'Substantially'（三・一四〇）表現されて輝いていた」という。そしてミルトンのキリスト観を全面的に吐露したものは、次の天使たちの頌歌である。

Thee next they sang of all creation first,  
 Begotten Son, divine similitude,  
 In whose conspicuous countenance, without cloud  
 Made visible, the almighty Father shines,

Whom else no creature can behold ; on thee  
 Impressed the effulgence of his glory abides,  
 Transfused on thee his ample Spirit rests.  
 He heaven of heavens and all the powers therein  
 By thee created, and by thee threw down  
 The aspiring dominations : . . .

汝を、ついで彼らは、すべて創造られしもの初子よ、  
 神の生み給ひし御子よ、神の像よ、と誉め称えた。

まことに、蔽い隠す雲一片もなく、明々白々としてあらわに  
 見ゆる汝の面には、本来ならば造られしいかなる者も  
 見ることをえざる全能にして父なる神の御姿、今こそ輝く。

汝の上に、神の栄光の輝き強く照り映えてとどまり、  
 汝の上に、神の豊かなる御靈注ぎ込まれて鎮まる。

神は、天の中なる天と、そこに住むすべての天使とを  
 汝によりて創造り給えり。しかしてまた、汝によりて

叛逆の天使たちを亡ぼし給えり。

(三・三八三―九二)

この一節から次の諸点が指摘できる。(一)御子自身は被造物として創造主なる父とは異なること、(二)御子は神の像として実質的に神を表現していること、(三)御子を通して知るのほか父なる神を知ることではできないこと、(四)御子は造り主でもあり、裁き主でもあること、などである。もとより、すべて聖書のなかに典拠をもつ表現ではあるが、(一)と(四)との間にみられる微妙な相違は、近代精神の二つの側面がミルトンの思想に投影したものである。まず(四)から見てゆきたい。

『失楽園』の別の箇所では、神は御子に向かって次のように呼びかけている、「汝、わが愛する子よ、わが栄光の輝きを示す者よ、見えざるものを、——わが神性を、その面に見えるものとして示し、わたしが定める行為をその手で示す者よ、ああ、第二の全能者よ！」(六・六八〇—八四)

墮天使の首たるサタンの立場からは、「われわれは造られた者なのだと、お前は言うのか？ 父から子へと仕事に移され、その二番目の者の手で造られたのだ、と言うのか？ おお、なんとという奇怪かつ斬新なる意見！ そういう教義をお前がどこから学んできたのか知りたいものだ！」(五・八五三—五五六)という感想になる。

御子が創造主として登場するその他の箇所を列挙すれば、このサタンのことばを誘発したアブデイルのことば、「全能の神は、その御言葉によるが如く、実にあの御子によって、すべてを、そうだ、実に汝サタンさえも造り給うたのだ」(五・八三五—三七)は勿論、第七巻においては、全能者が「汝わが子よ、わが『言』よ、わたしは汝によって今言ったことを行いたい。言え、汝、さらばことは成就しよう！ すべてを覆う聖霊と能力とをわたしは汝につけて送る。直ちに戦車を駆って行き、『混沌』に命ずるがよい、定められた境界内において天と地とをあらしめよ、と！」(七・一六三—一六八)といわれると、「その語られたことを、彼の『言』である聖なる御子が実現し給うたのだ」(七・一七四—一七五)とある。

『キリスト教教義論』一卷七章には、「創造とは、その能力と善性との栄光を顕わさんとて現に存在するあらゆるものをその言と霊とによって、すなわちその意志によって父なる神が造られた行為である」とあり、さらに、この「言」とは御子のことをいうともある。しかしここでは、「言」がまた何か抽象的原理のような響きをもっている。

ところが『失楽園』では、御子が戦車に乗って、大いなる遠征の途につくのである(七・一九二—)。「創造の主なる御言」(the omnific Word) (七・二二七)は、深淵の怒濤をしずめ、「父なる神の栄光」(paternal glory) (七・二一九)につつまれて、混沌の奥深くに乗り入れ、「黄金の両脚器」(the golden compasses) (七・二二五)を用いて、この宇宙とすべての被造物の限界を定めた。ブレイクにもコンパスを使って創造する挿絵があるが、創造者ユリゼンは老人として描かれ、ミルトンの場合におけるごとく「子」ではない。

ともあれ、これは創造の第一日であった。六日間にわたる創造を終え、第七日目には、「力の御子」(The trial power) (七・五八七)はふたたび天の住処、永遠の宮居に凱旋し、父なる神とともに盤石不動の王座につかれた、という。この一節で興味ぶかいは、父なる神について、「彼もまた見えざる姿のまま御子とともに、ここよりかしこに出かけ、しかもここに留まっておられた(遍在の主なる神は、かかる特権をもっておられる)」(七・五八八—九〇)と述べていることである。

創造の仕事は御子に託されているはずであった。しかし六日間にわたる創造の過程で、読者はほとんどそのことを忘れ、単に神と呼ばれている創造主を父なる神のことであると思った。そのように紛らわしい表現がわざと用いられていた。しかし第七日目にいたって、それに決着をつけたのがこの一節である。使徒信条も、創造は父なる神の分担であったからである。

ミルトンにおいては、審判も、創造と同じように、キリストの任務とされる。新約聖書では、ある場合には神が

(マタイ伝一八・三五、ロマ書二・五、三・六)、ある場合にはキリストが(マタイ伝一六・二七、二五・三一―四六、ヨハネ伝五・二七、一二・四八、コリント後書五・一〇)、最後の審判者として描かれている。使徒信条も、審判はキリストの任務としている。しかしミルトンにおいて特徴的なことは審判をキリストのみの任務とは見なさず、キリストは父の「代理者」Viceregent(一〇・五六)であり、「天国であれ、地上であれ、地獄であれ、そこで一切を裁く力」(一〇・五七)を委ねられている、としている点である。ファウラーは典拠をヨハネ伝五章二三節に求めているが、ヨハネ伝のように、裁きのことはすべて子に委ねて、「父はだれをも裁かない」のではない。父の仕事は「命じたもうごとであり、わたしの仕事は、あなたの至高き御意志を天と地において行うことであります。……あなたに対して罪を犯した者たちを地上において裁くために、わたしは出かけます」、かつそれは、「あなたの愛子であるわたしが永久にあなたに悦ばれるために他なりません」(一〇・六八―七二)と御子はいう。こういうふうにミルトンは、キリストの背後につねに父なる神の存在を意識させる書き方をしている。

「温情豊かな審判者」(一〇・九六)として、御子がアダムとイヴに宣告を下すために現われたとき、園の中を歩む二人は、「神の声」(一〇・九七)がそよ風に吹かれて耳に響いてくるのを聞いた。そしてその四行後にも、もう一度御子が「神」と書かれている。そればかりか、彼は「審判者」(二〇・一一八、二二六、一六〇、二〇九)であると同時に救い主でもあるから、死刑の執行を延期するのみならず、裸形のままなる二人を憐れみ、みずから毛皮を整えて二人に着せた。そのときの御子の姿を、「一家の父'father of his family'(一〇・二二六)にふさわしく」とミルトンは描く。読者はここでも一瞬、この神が御子であることを見失って眩惑される。「そのあと、急遽昇天し、父なる神の御許に帰り、その祝福に満ちた懐に以前と変らぬ栄光のうちに迎え入れられ給うた。そして、既に怒りを鎮めておられる神に、御自身と人間との間に起こった一切の事柄を(勿論神は一切を知っておられたが)、慈愛のこもった執り成しの

言葉を交えながら報告された。」(二〇・三三四—二八)原文では、

To him with swift ascent he up returned,  
 Into his blissful bosom reassumed  
 In glory as of old, to him appeased  
 All, though all-knowing, what had passed with man  
 Recounted, mixing intercession sweet.

him, he, hisといずれも小文字で、父と御子との区別なく書かれている。平井訳は隈取りが明白で分りやすい。が原文は、かえって両者が混じり合うように書かれている。区別はありながら、しかも一体であることを印象づけるために、わざとそうしたように思われる。

では、何故、ミルトンがそのような措置をとったのか。一つは、不可視の神を表現するには、実質的にその像である御子キリストに依るほかはないからである。見えないものを見えないものとし、見えるものを見るものとする、見えないものを見るもので推し量ってはならない、というのが近代人の決意であった。信仰と理性、宗教と哲学(ないし科学)の領域は截然と区別された。そのとき、詩は見えるものをもって見えないものを表現しなければならなかった。かつては「存在の鎖」の図像の最上段に白髯の老人を描いて、「日の老いたるもの」、父なる神をあらわした。しかし、こういう中世的リアリズムはもはや通用しない。したがって『失楽園』では、父なる神の顔について具

体的な描写はない。その声が記されるのみである。その代りに御子とその名代として具体的に描かれることになった。だが、この精神的動向はミルトンにアリウスの神観をいだかせることになり、それが本節の初めに引用したキリスト頌歌の(一)に出ている。

しかし、これは近代精神の消極的一面である。もっと積極的な理由は、ルターの宗教改革によって、救い主キリストの重要性が著しく増したことである。腐敗した宗教への反省は良心の覚醒となり、良心の覚醒は罪の意識の深化となり、罪の意識の深化はキリストの贖罪への欲求となる。キリストが人間の罪を贖いうるためには、キリストが徹底的に神でなければならぬ。キリストが神以下のものであるならば、彼はとうてい人間の罪を贖うことはできない。キリストと神とは、完全に一つでなければならぬ。ルターはそれをパンチのきいたことばで、こう言っている、「神が苦しみを受けた。人間が天地を創造した。人間が死んだ。永遠より存在する神が死んだ。処女マリアの胸で乳をのむ少年が万物の創造主である。」<sup>(13)</sup>神は死んだ、といい、人間が万物を造る、という。コンテクストを変えればニーチエやマルクスを連想させるようなことばが、最も正統的なキリスト教の枠組のなかに結びつけられている。ただし御子による創造をこれほど力強く表現したことばは稀だと思ふ。

ルターの場合のみならず、ミルトンの『失楽園』においても、こういうキリストへの関心の集中が、原罪の発生たる墮落を契機に起こるのである。『失楽園』第二二巻において、天使マイケルの話を聞き終ったアダムは、自分は「人間としてのこの器に盛りうる限りの知識」*“my fill/Of knowledge, what this vessel can contain”* (二二・五五八―五九)を得た、今後は、順うことこそ最善であり、唯一の神を畏怖をもって愛し、つねにその御前にあるごとく歩み、絶えずその摂理を信じ、すべての被造物に恵みを垂れたもう神にひたすら依り頼み、つねに善をもって悪に打ち勝ちつつ、信仰をもっている者にとっては死も永遠の生命にいたる門にすぎないということを手伝い、と想ふ。しかも、

これを「永久に栄あるわが贖罪、主と今こそ拝みまつる方の範例によって教えられた」(二二・五七二―七三)という。

それに対して天使マイケルは、「それが理解できた以上、お前は最高の知恵、the sum/of wisdom」(二二・五七五―七六)をえたことができる。もうそれ以上の高い望みをいだいてはならない、――よしんばお前がすべての星の名や、すべての天使や、すべての永遠の秘密や、すべての自然の現象、つまり天と空と地と海における神の造り給うたもの、を知り、この世のすべての富や、すべての支配権や、一大帝国を手中に収めることが今後できたとしてもだ。必要なことは、ただひたすらお前の知識に、それにふさわしい行為を加え、信仰を加え、美德と忍耐と節制を加え、さらに、やがて聖き愛という名称で呼ばれるはずの、そして他の一切のものの魂でもある愛を、加えることだ」(二二・五七五―八五)という。

キリストという人格を媒介として、知識から知恵へ、行為へ、信仰へ、美德へ、愛へ、つまり、主知主義から主義への徹底的な転換が行なわれたのだ。これはアリストテレス的トマス的ドミニコ会的アプローチから帰結する「至福直観」とは発想を異にするものである。それゆえ、それに続く次の二行は、はなはだ巧妙である。

Let us descend now therefore from this top

Of speculation: . . .

だからわれわれはこの「見晴らしのきく

山頂」から降りようではないか。(二二・五八八―八九)

speculation は、もともと「見ること」を意味する。注釈者は、これは眺望の 'vantage-point' であると同時に



'height of theological speculation' であること記している。(15) いまやアダムとイブの前には広々とした世界が広がり、二人は *vita contemplativa* を捨てて *vita activa* に乗り出すことになる。

注

- (1) 斎藤勇『ミルトン』(研究社、一九三三)八八頁、『斎藤勇著作集第四卷』(研究社、一九七五)六〇頁参照。
- (2) J. Van Eugen, 'Beatific Vision' in *Evangelical Dictionary of Theology*, ed. Walter A. Elwell (Michigan, 1986), pp. 130—31.
- (3) Giuseppe Vandelli (ed.), *La Divina Commedia* (Milano, 1965), p. 922, Notes.
- (4) Charles S. Singleton (tr. with a commentary), *The Divine Comedy: Paradise, 2, Commentary* (Princeton, 1977), p. 587.
- (5) 三谷隆正『幸福論』、『三谷隆正全集第二巻』(岩波、昭40)三八一頁。この部分に関するかぎり三谷隆正の訳が最も優れている。
- (6) C. S. Singleton, *op. cit.*, p. 457.
- (7) St. Thomas Aquinas, *Summa Theologica: Latin Text and English Translation, Introduction, Notes, Appendices and Glossaries*, Vol. XLVI (Eyre & Spottiswood, London, and McGraw-Hill Book Co., New York, 1966), pp. 24—29.
- (8) St. Thomas Aquinas, *Summa Theologica: First Complete American Edition*, tr. Fathers of the English Dominican Province, Vol. II (Benziger Brothers, Inc., New York, 1947), pp. 1933—34.
- (9) 岩下壮一『中世哲学思想史研究』(岩波、昭29)三二二—三三頁。
- (10) 岩下壮一は前掲書三二八—三〇九頁において、『神学大全』の各所から該当記事を引用しつつ、知性と理性の相違を述べているが、知性はミルトンの「直観的理性」に、理性は「推論的理性」と一致する。

- (10) Carey & Fowler (ed.), *The Poems of Milton* (Longmans: London & Harlow, 1968), p. 779, Notes.
- (11) Charles Kingsley Barrett, *A Commentary on the Epistle to the Romans* (Black's NT Commentaries, London, 1957), p. 35, quoted in *The International Critical Commentary: The Epistle to the Romans*, Vol. 1, by C. E. B. Cranfield (Edinburgh, 1975), p. 116.
- (12) *Complete Prose Works of John Milton*, VI. (Yale Univ. Press, New Haven & London, 1973), pp. 300—01.
- (13) Quoted in Paul Althaus, *The Theology of Martin Luther*, tr. Robert C. Schultz (Fortress Press, Philadelphia, 1984), p. 194.
- (14) 「神の御心によって養えられた」ところを指して、ヘミキウムの傾向の伏在を認めなければならないであろう。
- (15) Carey & Fowler, *op. cit.*, p. 1056.